慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	国際シンポジウム : "Emotional animals, Sensible humans"
Sub Title	
Author	渡辺, 茂(Watanabe, Shigeru)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム人文科学分野論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2008
Jtitle	活動報告書 Vol.2, (2008.) ,p.55- 56
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	第2章 : シンポジウム等の活動報告
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002002-20090300-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

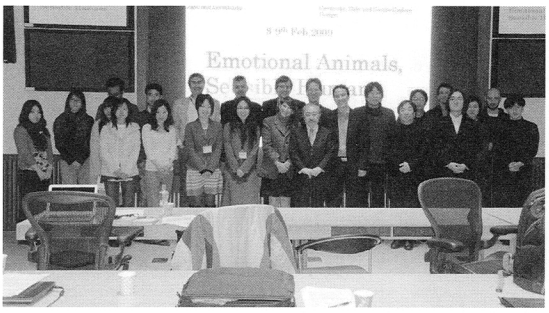
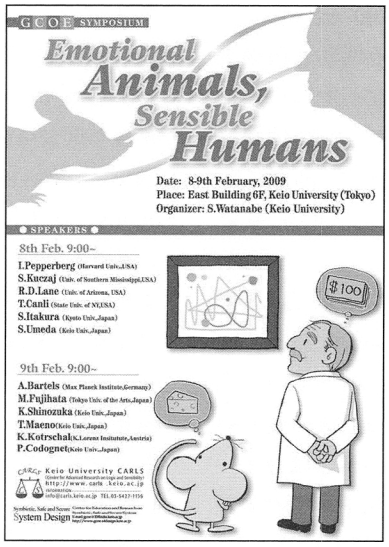
The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

14 国際シンポジウム
"Emotional animals, Sensible humans"

開催日　2009年2月8日－2月9日
企画班　全体
共　催　環境共生・安全システムデザインの先導拠点（塾内システムデザイン・マネジメント研究科）
企画者　渡辺茂、前野隆司
講演者　I.Pepperberg (Harvard Univ.,USA) 、S.Kuczaj (Univ. of Southern Mississippi,USA) R.D.Lane (Univ. of Arizona, USA)、T.Canli (State Univ. of NY,USA) S.Itakura (Kyoto Univ.,Japan) 、S.Umeda (Keio Univ.,Japan) (8日)
A.Bartels (Max Planck Institute, Germany)、K. Kotrschal(K.Lorenz Institute, Austria)、M.Fujihata (Tokyo Univ. of the Arts,Japan)、P. Codognet(Keio Univ.,Japan)、T.Maeno(Keio Univ.,Japan)、K.Shinozuka (Keio Univ.,Japan) (9日)

2009年２月８、９日にわたって本拠点の全体シンポジウムが行われた。これは昨年の"Rational animals, irrational humans"に続くもので、今回は「論理と感性」のなかで特に感性に重点を置いたシンポジウムである。開会に先立ち拠点リーダーが本拠点の概説を行った。ついで、午前中は山崎特別研究准教授の司会でAlexの研究で著名なIrene. Pepperberg教授がEmotional animals and sensible humans: Application to gray parrots（情動的動物と感性的人間：オウム研究から)、イルカ研究でよく知られているStan.Kuczai教授がWhy do dolphins smile? A consideration of dolphin emotion and emotional expression（なぜイルカは笑うのか：イルカの情動と情動表出）という講演を行い、動物の情動行動についての議論を行った。昼食をはさんで、午後は安藤教授の司会で京都大学板倉教授がDevelopment of mentalizing in human infants（ヒト乳児におけるメンタライジングの発達）という講演でdevelopmental cyberneticsという新しいアプローチを紹介し、Turhan, Canli教授がThe molecular psychology of human emotionality（人間の情動の分子心理学）として、これまた新しいアプローチを紹介した。この分子心理学は分子－脳－行動という枠組みであり、遺伝子ですべてが解明されるということではない。休憩をはさんで、Richard D.LaneがLevels of emotional awareness and the brain: A framework that captures what is and is not unique to human emotion（情動の意識レベルと脳：なにが人間の情動に固有か）という正当的な意識レベルの段階の概説を行い、最後に梅田准教授がFunctional neuroanatomy of social emotion（社会的情動の機能的神経解剖学）として、情動や心の理論についての機能脳画像研究、神経心理学研究を紹介し、全体討論を行った。当日は会場がほぼ一杯になる参加者があり、若手研究者のポスター展示も行われた。その後、懇親会でさらに議論が行われた。

２日目は伊澤特別研究准教授の司会でマックスプランク研究所のAndreas.Bartels教授がThe neurobiology of love（愛の神経生物学）として愛情の神経機構を論じ、ローレンツ研究所のK.Kotrschal教授がEmotionality and relationships-about geese and humans-animal dyads（情動性と関係性：人間と動物の関係とガチョウ）という講演でガチョウの高次社会行動およびヒト―動物の関係についての報告を行った。午前中最後は篠塚研究員がAntagonistic effects of vasotocin on parental behavior in convict cichlids（コンビクトシクリッドの親行動におけるバソトシンの阻害効果）として雌雄ともに養育行動をするシクリッドフィッシュにおける拮抗薬の効果の性差およびストレスについての実験を報告した。なお、コーヒーブレークでは拠点リー

ダーのお手前が披露された。午後は予定された星特別研究助教がインフルエンザのため、拠点リーダーが急遽司会を代行し、まず前野教授によるEmotional Robots and Humans: What is emotion of robots and humans for?（情動的ロボットと人間：人とロボットの情動はなんのためか）という講演をおこない、意識は虚構であるという議論を展開した。ついで慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究機構のPhillipe.Codognet特別研究教授がLeibniz, the Art of Invention and Combinatorics : the dream of going beyond rationality in Modern and Digital Art（ライプニッツ、創意と組合わせ理論という芸術：合理性のかなたを夢見るデジタルアート）として無作為な組み合わせから作られるアートの可能性、あるいはレディメードなどのアートの起源としてのライプニッツの論理を紹介した。最後は東京藝術大学大学院の藤幡教授がUnderstanding through Visual Information: from a practical point of view （視覚情報理解：作品制作の現場から）として豊富な資料を示しながら、新しいメディアによる新しい芸術の可能性を論じた。その後、２日間にわたる総合討論を行い、ビジネスミーティングでは参加者全員がこのシンポジウムに基づいてなんらかの出版事業を行うべきだという意見で一致した。シンポジウム終了後、有志による私的な河豚晩餐が行われ、一同ヒレ酒を楽しんだ。

（渡辺茂）